

「つみかさね」

校長 星野 貞邦

梅雨の時期、天候もすっきりしない日が続いており、本格的な夏の到来が待ち遠しい季節となりました。早いもので今学期も残すところ3週間余り、保護者・地域の皆様方におかれましては、この1学期、本校の教育活動にご理解・ご支援をいただきましたことに感謝申し上げます。

さて、先日3年生にとっては最後の公式大会となるさいたま市学校総合体育大会が開催され、男子バスケット部が3位、女子卓球部団体3位、女子バドミントン部の団体と個人、男子テニス部個人、陸上部が県大会出場を果たしました。県大会出場を逃した部活動の中には、相手と五分の試合運びでフルセットの末、惜しくも敗れた部活もいくつもありました。それらに共通していることは、敗れたあとの生徒の目には必ずと言っていいほど「涙」があるということです。その涙の意味は、悔しさもあるかもしれませんが、これまで頑張ってきた自分に対する充実感や達成感のようなものも含まれていると思います。この「涙」を今後の生活や進路に向けて生かしてほしいと考えます。

私も出来るだけ多くの試合に応援に行きましたが、どの試合でも生徒の真剣な姿や感動する場面をたくさん見ることができました。その中でのことを二つ紹介します。

一つ目は、野球部の1回戦の試合です。5対2のリードのまま最終回を迎え、誰もがこのまま岸中の勝ちとっていました。しかし、試合とはわからないもので最終回の表に同点に追いつかれ、相手は逆転しそうな勢いでした。グラウンドで精一杯プレーする選手、ベンチで大きな声で応援する選手、一つ一つのプレーに一喜一憂して応援する保護者、選手も応援する人も一体となっていました。相手チームの勢いをどうにか同点のまま切り抜け、その裏の攻撃でさよなら勝ちという劇的な勝利でした。スタンドに並んで喜びに溢れた表情でお礼のあいさつする選手、ふと後ろを見ると応援している保護者の目にも涙が潤んでいる光景が見え、私自身、胸が熱くなり、体が震える感動を覚えました。その後、野球部は3回戦まで進み敗れ、県大会出場になりませんでした。選手は「やるだけやった」という充実感を伴った感動があったと思います。そして、この経験は、必ずや生徒一人ひとりの心に何か大切なものを残し、今後に生かされる経験だと確信しました。「感動をありがとう！」

二つ目は、バレーボール会場でのことです。他の学校の選手ですが、試合で強烈なサーブを正確にミスすることなく連続してサービスエースを取っている選手がいました。あんなにも正確に、しかも連続して入るには相当な練習が必要になります。その学校の顧問に、「すごいね、あの子」と話したところ。その顧問は、当然のことのように、あの子は背が低いので、サーブとレシーブについては、誰にも負けないつもりで、毎日、コツコツ練習し、練習が終わった後も一人で黙々と練習している。その「つみかさね」の結果、あの子の精神は強くなり、これだけ練習しているのだから、絶対に失敗しないという自信ができていたとのことでした。日々の「つみかさね」は人を強くし、自信を育てます。ある日突然、学校の成績が向上したり、急にバスケットボールにおいてシュートがうまくなったり、パスがつながったりすることがないのはわかることだと思います。

学業や競技、生活のすべてが「つみかさね」の上に成り立つものということを改めて考えさせられました。右記に私の好きな詩「つみかさね」を紹介します。

「つみかさね」

一球一球のつみかさね 一打一打のつみかさね
一歩一歩のつみかさね 一坐一坐のつみかさね
一作一作のつみかさね 一念一念のつみかさね
つみかさねの上に咲く花
つみかさねの上に熟す実
それは美しく尊く 真の光をはなす

<坂村真民の詩より>